



TITLE:

# リカアドに於ける労働價值法則の 妥當性に就て(一)

AUTHOR(S):

森, 耕二郎

---

CITATION:

森, 耕二郎. リカアドに於ける労働價值法則の妥當性に就て(一). 經濟論叢 1925, 21(2): 258-274

ISSUE DATE:

1925-08-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128308>

RIGHT:

# 京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第二號 第十二卷

大正十四年八月一日發行

## 論叢

商書周書

に見はれたる政治經濟思想

法學博士

田島 錦治

公益上の免稅

法學博士

神戶 正雄

運賃論見たる繋船同盟と海運同盟

法學士

小島 昌太郎

自殺統計論

法學博士

財部 靜治

## 說苑

徳川時代岡山江戸間の海運

經濟學士

黒 正 巖

リカアドに於ける勞働價值法則の妥當性に就いて

經濟學士

森 耕二 郎

## 雜錄

近世農村の性質

經濟學博士

本庄 榮治 郎

社會統計てふ名目の意義

法學學士

財部 靜治

手形交換制度の先驅としての里昂のベーマン

經濟學士

小川 福太郎

物價の變動と從量稅

法學士

汐見 三 郎

## 法令

漁業共、施設獎勵規則・漁業財團抵當登記取扱手續・職業紹介法施行令中の改正・關東州の生産に係る物品の輸入税の免除に關する法律・國有林野火防組合規程・預金部預金を郵便貯金に振替の件

（禁 轉 載）

## リカアドに於ける勞働價值法則の

## 妥當性に就て (二)

森 耕 二 郎

### 緒 言

既に前稿『アダム・スミスに於ける勞働價值法則の妥當性に就て』<sup>1)</sup>に於て瞭にしたるが如く、スミスの價值論の基本的内容に於ては、費消勞働價值説(本來の形に於ける勞働價值説)が、かなり成形せる態様に於て、提言せられてゐるに拘はらず、それと相交錯して、支配勞働價值説が主張せられて居り、そうしてこの二者は何等明確に關係附けられてゐないがため、吾々をして、彼れの價值論の本體が奈邊に在るかを判斷するに悩ましむるのであるが、更に彼が資本蓄積せられ、土地占有せらるゝに至りたる社會に於ける價值論としてとるところのものに於ては、右の二つの價值説の外に、なほ一つの價值説、即ち生産費價值説が、それら相互の關係が何等瞭にせらるゝことなくして、提言せられ居り、そうしてこの價值説が結局に於て彼れの價值論の代表的なるものとなり了つたかの觀があるのであつて、彼れの價值論の内容は益々複雑に、(費消)勞働價值説の妥當性は益々不純になるに至つたのである。要するに文明社會に於けるスミスの勞働價值論に

1) 本誌第二十卷第五號所載

於ては、もと／＼その基本的内容に於て、かくの如き不純があるに加へて、彼が(勞働)價值と生産價格とを充分に關係づけることができなかったがため、即ち異なる生産部門間に於ける競争の齟齬す價值の生産價格への轉化を理解することができなかったがため、結局勞働價值説は生産費價值説にとつて代はられ、それ自身は殆んど表面より姿を没するに至つたのであつて、スミスに在りては、本來の形に於ける勞働價值法則は、文明社會に於ける貨物の交換價值の支配法則として、この二つの意味に於て、不充分なる程度、不純なる形にて、支持せられたにすぎなかつたのである。

このスミスの勞働價值論に於ける支配勞働價值説を主として展開支持したのがマルサスであるに對し、費消勞働價值説をその支配勞働價值説から全く分離せしめ、それを純化發展して、自己の經濟理論——分配理論——の出發點としたのがリカードである。そうしてこのこと——一つの貨物の生産に必要な勞働の分量は、その貨物が交換、支配するであらうところの勞働の分量(それは前者の指數たるにすぎない)とは同じものではなくして、前者即ち費消勞働こそ價值の眞實の原因、尺度標準であるといふこと——は、勞働價值説の一大進歩若くは純化を意味するものであつて、マカロツクの如きは、『經濟學理論の進歩は、まことにこのことに負ふことが頗る大である』<sup>1)</sup>としてゐるのである。兎に角リカードの勞働價值論が正統學派に於ける諸々の勞働價值論のうちにありて、最も純粹にして成形せるものであることには何等疑がないのである。

リカードに依れば、貨物(任意可増性の貨物)の交換價值(相對價值)の決定は、即ち交換に於

1) Mac Culloch, Principles of Political Economy, 2 ed. 1830, p. 299.

て、一財に對して與へらるゝ他財の分量を決定するところの規則は、殆んど全くその各々の生産に費されたところの勞働(直接勞働および間接勞働)の相對的分量に依るものである。これは彼れの勞働價值論の根本的命題を成すものであるが、彼は、異なる生産部門に於て使用さるゝところの固定資本と流動資本との組合はせに差異ある事實並びに固定資本の持続性および流動資本の流通期間に異なる段階あるの事實、換言すればその實かゝる資本の有機的組成に差異ある事實、に當面して、右の勞働價值法則を以てしては、かゝる場合に於ける貨物の交換價值を説明するに足りないのを見出して、利潤および勞賃をも、少許の程度に於てはあがあるが、交換價值の構成要素として認容せざるを得ないことゝなり、遂に彼れの本來の形に於ける勞働價值説を一種の制限の下に置くに至つたものである。

このリカアドの勞働價值論に對する態度よりして、こゝに取扱はんとするところの彼に於ける勞働價值法則の妥當性に關聯して、二つの問題の提起せらるゝことが可能であると思ふ。即ち第一に、リカアドはその勞働價值法則(純粹なる形に於ける)を如何なる社會、生産方法の下に於ける價值、價格現象に妥當すべしとしたのであるか、彼は、それは原始社會、文明社會(資本蓄積せられ、土地占有せらるゝに至りたる社會)を通じて、等しく妥當すべきものであるとしたのであるか、或はそれは單り文明社會にのみ妥當すべきものであつて、文明社會に於ては、他の價值法則即ち生産費價值法則が妥當すべきものであるとしたのであるか、問題となる。次に問題となるのは、リカ

アドに依つて爲されたるどころの所謂勞働價值説への修正、若くは制限は、一體何を意味するか、即ち修正若くは制限せられたる後に残つたところのリカアドの價值論は、勞働價值説として、如何なる意義と程度とに於て、支持せられたのであらうかの問題これである。

私はこの論文に於て、リカアドに於ける勞働價值法則の妥當性に關聯して提出せらるゝところのこの二つの問題を吟味することにより、勞働價值學說發展史上に於けるリカアドの勞働價值論の地位の如何なるものなるかを見ると同時に、一般勞働價值法則の本質の如何なるものなるかを理解するに資して見たいと思ふのである。

## 本 論

(一) 先づ第一にリカアドはその本來の形に於ける勞働價值法則を如何なる社會に妥當すべしとしたのであるかを吟味して見やう。この點に就ては一二の異説がないでもないが、スミスの場合に於ける程に、その解釋は紛淆してゐない。一般に解せらるゝ所に依れば、リカアドの勞働價值法則は、總ゆる社會制度、生産方法に同様に妥當すべきものであるとせられてゐる。即ち原始漁夫および獵師の未開社會に於てのみならず、第十九世紀の英國の大規模産業の時代即ち資本家的社會に於ても、貨物の交換價值はそれが生産に費されたる所の勞働の相對的分量に依つて決定せらるゝものであると云ふ。換言すればリカアドは價值法則の妥當限界に就て、社會制度、生産方法の相違を顧慮するところがなかつたと云ふのである。例へばデイールは云ふ。

『假令リカアドは、労働(價值)法則が、純粹には、原始經濟狀態に於て現はれるものであつて、發達せる國民經濟に於ては、それは彼れの爲した修正に依りて修正せらるゝであらうことを云つてゐるとは云へ、この根本原則は總ゆる國民經濟の階段に於て妥當すべきものであるとせられてゐる。』

ツツカアカルドも亦リカアドの價值法則が總ゆる社會を通じて妥當すべきものであるとする一人である。彼曰く。

『任意に増加し得べき貨物は、リカアドの言ふ所に依れば、それが生産に必要とする労働の尺度に依つて交換される。このことは獨り土地の獲得せられ、資本の蓄積せらるゝ以前の時代のみならず、今日の如く土地私有せられ、資本が生産を幫助する時代にも亦妥當するものである。』<sup>1)</sup>  
更にローゼンベルグに依れば、リカアドの『労働が交換價值の根基であるこの原則は、社會發達の總ゆる段階に妥當すべきものであつて、たゞ單り社會發達の初期の段階にのみ妥當すべきものとは限られて居らぬのである。』<sup>2)</sup> (註)

(註) 同様の解釋をなすものに左の如きものがある。

例へばレブンスキイは云ふ。

『リカアドは、「社會の初期蒙昧の狀態」に於てのみならず、資本が蓄積せられ、土地が占有せられたる後と雖も、この原理(労働價值の原理)は依然として眞理である、と云ふことを證明せんと努めた。

『リカアドはスミスに反對して、彼れの理論を樹てゐるに當り、資本主義的社會を考へてゐたのであつて、原始社會を考へて

- 1) Diehl, K., Erläuterungen zu David Ricardos Grundgesetzen der Volkswirtschaft und Besteuerung, Teil I, S. 19.
- 2) Zuckerkandl, Zur Theorie des Preises 1889. S. 253.
- 3) Rosenberg, Ricardo und Marx als Werttheoretiker, SS. 16—7.

ゐたのではない。』

更にロストは云ふ。

『この命題(労働価値の命題)は、生産が殆んど全く労働によりてのみ行はるゝ所の原始状態にのみならず、労働の外に特に資本も亦生産行程に於て通常役割を演ずる所のそれより以後の時代にも亦妥當するものである。』

ところがこの解釋に反對して、リカアドは現今の社會に於ける價值論としては、一般的に始めから生産費説を採つたのであつて、その純粹なる形に於ける労働價值法則はたゞ單り原始草昧の社會にのみ妥當すべきであるとしたのであると解するものがある。この態度は新らしくリカアドの價值論を解釋して、彼をその所謂謬妄たる労働價值論の主張者たる汚名より救はんとする所謂リカアド復活(Rehabilitation of Ricardo)の試みの専らとるものであつて、その主張者は言ふ迄もなくマーシャルである。マーシャルはこの點に就ては左の如く言つてゐる。

『彼(リカアド)は第一章第一節に於て、資本の使用殆んどなく、いづれの労働の價格もはゞ相似たる初期の社會的段階に於ては、貨物の價值若くはそれが交換せらるゝ相手の貨物の分量は、それが生産に必要な労働の相對的分量に依るものであると云ふことは、一般的に言へば、眞實であると論じた。』

『ところが彼は、これらの推論をそれ以後の文明社會に於て爲すのは適當ではない。價值の生産費に對する關係は、彼が出發したところのそれよりもつと複雑なるものであることを示さうとしたのである。』

- 1) Lewinski, Founders of Economics, p. 112.
- 2) Rost, Die Wert-und Preistheorie, S. 39.
- 3) Marshall, A., Principles of Economics. 8 ed. p. 814.
- 4) Marshall, ibid. p. 815.



これと相似たる見解をさるものにベエム・バワアクがある。彼は云ふ。

『リカアドは社會の二つの異なる時代を區別する。第一の時代即ち原始時代——少しの資本しかなく、土地占有の全く存在しない限りに於ての原始時代——に於ては、貨物の交換價值は全くそれに費されたる勞働の分量に依つて決定せられるであらう。第二の時代即ち近世の國民經濟の屬する時代に於ては、資本の使用に依つてそれは修正せられる。』(註)

(註) カウラの解釋にも相似たるものがある。『リカアド……は價值の問題を論ずるに當り、(スミスと)同様に、人類の自然的原始狀態の先天的構成より出發した。』<sup>2)</sup>

なる程リカアドの價值論の中には、『社會の初期の段階に於ては、これらの物貨の交換價值は、即ち一貨物の幾干量が他の貨物と交換せらるべきかを決定する所の規則は、殆んど全く各貨物に費されたる勞働の比較的分量の多少に依るものである。』と云ひ、『社會の初期の段階にして、未だ多くの機械又は持續的資本が使用せられない時に於ては、相等しき資本によつて生産せられる貨物は、殆んど同一の價值を有し、而してその生産により多い又はより少い勞働が要求さるゝの故のみを以て、相互相對的に騰貴し又は下落するであらう、……』と云ふが如き文章があつて、それは一見直ちにマーシャルの主張を裏書するがやうである。がしかしそれはたゞリカアドの謂ふ所の勞働價值法則が、社會の初期の發達段階に於ては、持續的資本の使用が比較的に少いと云ふ理由を以て、かゝる社會(それは、彼に依れば、資本家的社會と概念上根本的に分別せらるべきものとせられて居らぬ。そこには彼に依れば資本もある。)に於ては、比較的に純粹に作

- 1) Böhm-Bawerk, Kapital und Kapitalzins, I. 4 Aufl. 1921. S. 83.
- 2) Kautsky, Die geschichtliche Entwicklung der modernen Werttheorien, S. 147.
- 3) 傍點は筆者の附するところ、以下同じ。
- 4) Ricard, Principles of Political Economy and Taxation, Gonner's ed. p. 7 (堀學士譯本 12 頁)
- 5) Ricardo, ibid. p. 35 (同譯本 67—8 頁)

用するものであるが、しかし資本主義的社會に於ても、かゝる意義に於て、假令若干の制限の下に於てあるとは云へ、同様に作用するものなることを否定するものではない。否彼がその勞働價值説に依つて瞭にせんとしたことは、實は彼れの時代に於ける現實の價值、價格現象に外ならぬのである。彼が勞働價值論を取扱ふ限り、資本主義的社會に於ける價值問題をその研究の對象としたること、随つて本來の形に於ける勞働價值説は、資本家的社會に於ける價值説に外ならぬことは、種々の理由に依り證明することができるのである。

(イ) 先づ第一にリカードは明に本來の形に於ける勞働價值法則が現實の社會に於ても適用さるべきことを、スミスの價值論に對する態度に關聯して左の如く言つてゐる。

『私が四頁に於て『諸國民の富』から抜き出した引用によつて次の事がわかるであらう、——假令アダム・スミスは、諸物を獲得するに必要な勞働の分量の割合は、それらが相互に交換するに當つての規則を與へる唯一の事情であると云ふ原理を充分に認めたとは言へ、彼はその原理の適用を、資本の蓄積、土地の占有に先だつ初期野蠻の社會に限り、利潤および地代の支拂はるゝ時には、恰もそれらは、貨物の生産に必要な勞働の單なる分量と離れて、その貨物の相對的價值に何らかの影響を與へるものであるが如くに取扱つた。』(第三版以後は削られてしまつた)

次に『經濟學及び租税の原理』第一章第一節には左の如き彼れの詞が見出される。

『これらの貨物(任意に増加することができない貨物)は、市場にて日々交換される貨物の一少部分を占めるに過ぎない。<sup>9)</sup>』

- 1) Ricardo, On the Principles of Political Economy and Taxation, 1 ed. 1817. pp. 10—11. 2 ed. 1819. pp. 14—15.
- 2) Ricardo, Principles of Political Economy & Taxation, Gonner's ed. p. 6. (堀學士譯本 11 頁)

『だから貨物に就て、その交換價值に就て、及びその相對的價格を規制するところの法則に就て、論ずる場合には、吾々は常に、人間の勤勞の働らきに依つてその分量を増加することができ、又その生産には競争が抑制なしに作用するやうなかゝる貨物のみを意味してゐるのである。』

これらのリカアド自身の詞は、彼が現今の資本家的社會に於ける商品の交換價值に就て、初めより研究せんとしたものであることを示してゐると思はれるのであるが、(口)更に彼が、ミスミスが貨物の交換價值の決定標準として、費されたる勞働と支配する勞働(即ち勞賃)との二つの標準を擧げることの誤りなることを指摘して、右と同節に於て左の如く言つてゐるのは、彼が明に資本主義的社會に於ける勞賃制度の存在を前提としての議論であつて、彼れの研究對象が資本家的社會に於ける價值、價格現象であることを優に示すに足るのである。

『若しもこのことが事實であり、勞働者の報酬は常に彼れの生産したる所のものに比例して定まるものであるならば、一つの貨物に費されたる勞働の分量と、その貨物が購買するであらう所の勞働の分量とは相等しく、そうして何れも正確に他の物の(價值)變動を測定することができらうであらう。がしかしこの兩者は等しくない。前者は多くの事情の下に於て、一の不變の標準であつて、他の物の(價值)變動を正確に示すものであるが、後者はその貨物に比較さるゝ貨物の數に應じて千變萬化するを免れないのである。』<sup>2)</sup>

『勞働(力)の價值も同様に可變的であつて、それは他の總ての物と同じく、社會狀態の總ての變化と共に一樣に變動するところの需要供給間の比例によつて影響さるゝのみならず、又勞働の

1) Ricardo, *ibid.* p. 7. (同譯本 12 頁)

2) Ricardo, *ibid.* p. 9. (同譯本 15 頁)

賃金を費して得らるゝところの食物およびその他の必要品の價格の變動によつても亦影響されるものではないか。<sup>1)</sup>』

即ちリカアドは、勞働(力)の價值、價格は、それが生産費即ち勞働者の生活資料に含まれてゐる勞働の分量に依り決定せらるゝものであつて、それと勞働者が生産する所の生産物に含まれてゐる所の勞働、即ちその價值、價格とは二つの別のものであることを云ふのであつて、言ふ迄もなく彼はこゝには、資本主義社會に於ける貨物の價值、勞賃を論じてゐるのである。

(ハ)次にリカアドは、異なる生産部門に於て使用される資本の持續性に差異ある場合に於ては、利潤および勞賃も亦貨物の交換價值の決定に參與することを認めてゐるのであるが(この修正若くは制限は歴史的時間的のものではなくして、論理的のものである)、この修正の後と雖も、彼は原始社會と資本主義社會とを同一視して、その修正せられたる價值法則はともにこれらの社會を通じて作用するものなることを述べてゐる。このことは亦彼が其勞働價值法則を單り原始社會に於て作用すべきものであるとした、と云ふ解釋の誤りなることを證明するは勿論、彼はその勞働價值法則は純粹には單り原始社會に於て妥當するものであるが、資本主義的社會に於てはそれは或る制限の下に於て妥當すべきものであるとした、と云ふデールの解釋に遽に同することのできないことを物語つてゐる。リカアドはこの點に就て左の如く言つてゐる。

『前節に於て吾々は、鹿や蛙を殺すに必要な器具や武器が、同じ耐久力を有し、且つ同一勞働量の結果であると假定し、かくて鹿と蛙との相對的價值に於ける諸變動は、全くこれらのもの

1) Ricardo, *ibid.* p. 10. (同譯本 17 頁)

を獲得するに必要な労働の分量の變動に依つて定まることを見た、——しかし、社會の各狀態の下に於ては、各種の職業に於て使用さるゝ道具、器具、建物、及び機械は、悉く耐久力の程度を異にし、又これらを生産するには異なつた労働量を必要とする。

「更に、労働を支持するための資本と、道具、機械、及び建物に投下さるゝ資本との間に於ける比例も、その組合せが種々難多である。固定資本の耐久力の程度にこの差異があること、ならびに二種の資本の組合はさるゝ比例にこの相違あることは、貨物の相對價值の不同を惹起する原因として、貨物の生産に必要な労働量の大小といふこと以外に、他の一原因を引き入れる、——この原因とは労働の價值の騰落を言ふ。」(註)

(註) このリカアドの立場を證明するに足る彼れ自身の詞をなほ一二左に引用して見やう。

『海狸および鹿を殺すに必要な總ての器具は一つの階級の人々に屬し、そうしてこれらのものを殺戮するに使用さるゝ労働は他の階級の人々に依つて提供さるゝかも知れない。而も猶ほ、これらのものと比較的價值は、資本の構成と、これらの動物の殺戮とに費されたる實際の労働に比例するであらう。資本が労働に比して豊富なるか或は稀少なるかの各異なれる事情の下に於ては、即ち人間の生活維持に缺くべからざる食物および必要品が豊富なるか或は稀少なるかの各々異なる事情の下に於ては、同一の資本の價值を一つの職業又は他の職業に提供する人は、得られたる生産物の半分、四分の一、或は八分の一を得、残りは労働を提供したる人々に勞賃として支拂はれるであらう、がこの分割はこれらの貨物の相對價值には影響することはない。何故なれば、資本の利潤が多からうと或は少からうと、即ちそれが五〇パーセント、二〇パーセント、或は一〇パーセントであらうと、或は又労働の賃金が高からうと低からうと、これらは兩方の職業に同様に作用するからである。』

『社會の職業の範圍が擴張し、或る者は漁獵に必要な獨木舟及び船具を造り、他の者は農業に用ひらるゝ種子、及び始め

1) Ricardo, *ibid.* p. 24. (同譯本 44—5 頁)  
2) Ricardo, *ibid.* p. 18. (同譯本 32—3 頁)

て用ひらるゝ機械を造ると假定するも、なほ生産されたる貨物の交換価値は、その生産に、貨物の直接の生産にのみならず、器具、機械を使用する或る特定の労働を效果あらしむるに必要な總ての器具又は機械の生産に、費されたる労働に比例すると云ふ前と同一の原理は、依然として眞實であらう。

「一層進歩の行はれたる、而して技術および商業の繁榮せる社會の狀態を見るも、吾々はなほ、貨物はこの原理に従つてその価値を異にしてゐるのを發見するであらう……」

(二)更にリカアドの價值論は抽象的演繹的に取扱はれてゐることは言へ、彼は單に理論興味から徒らなる抽象的價值論を弄びたるものではなく、まことにホランダアの云ふが如く、當時の實際的政策の理論的根據たらしめんがために書いたものであることは争ふことができない。(註一)實際リカアドは當時利潤の下落せる事情を擇ねて、マルサスとは反對にそれを勞賃の上昇(食料品の騰貴)に見出して、幾多の實際的政策(穀物條例の廢止はその最も主なるもの)を提言したのであるが、彼はこの實際的問題を理論的に基礎づけやうとして物したのが即ち彼れの労働價值論なのである。(註二)彼がその價值論の出發點から、當時の社會に於ける價值、價格現象を研究の對象としてゐたことは、この彼れの態度よりしても亦よく推測し得らるゝであらう。

(註一) ホランダアはその『リカアド價值論の發達』に於て、この點に就て左の如く云ふ。

『原理の第一版(一八一七)の第一章「價值に就て」は、獨立の記述としてよりは、寧ろ一八一三年頃からリカアドが主張し辯護して來た或る實際上の主張に對する理論的證據として物されたるものである。即ちリカアドは、(a)マルサスとは反對に、低き利潤は結局高き勞賃より結果することを信じ、(b)マカロツクの國債利子を削減せんとする案は、衡平正當にあらざることを主張し、(c)穀物の自由輸入は一般價格の憂ふべき下落を惹起すべしとの世間の憂懼に同ずることを拒否したのである。』

- 1) Ricardo, *ibid.* p. 18. (同譯本 34 頁)
- 2) Hollander 'The Development of Ricardo's Theory of Value,' *The Quarterly Journal of Economics*. XVIII August, 1904. pp. 455—91.
- 3) Hollander, *ibid.* p. 464.

(註二) バテンはこのことに就て左の如く言ふ。

『リカアドの經濟問題に對する思索は、利潤率を決定する事情の研究から始まつてゐる。そうしてこのことに就て、彼れの全體系は構成されてゐるのである。』

(木) なほリカアドの勞働價值論が平均利潤率の法則の存在を前提としてゐることは、彼れの謂ふ所の交換價值が自然價格のごとであり、そうして彼に依れば、自然價格は市場價格が平均利潤率の法則の作用により斷へず歸向せんとする中心を成すものである、ことから容易に推則し得らるゝ。而して平均利潤率の法則の存在は資本主義的社會に於て甫めて豫期し得らるゝものであるから、この勞働價值論が平均利潤率の法則の上に立つてゐると云ふことは、彼れの勞働價值論が資本家的社會に於ける價值論であるといふ解釋に極めて有力なる支持を與へるものである。

以上リカアド自身の詞、ならびに彼れ自身の研究態度を吟味することにより、リカアドは、彼れの勞働價值法則はたゞ單に原始社會にのみ妥當すべきであるとしたのではなくして、それは總ゆる社會を通じて（彼れに於てはそれが永久的なる唯一の社會即ち資本家的社會として現はれてゐるのであるが）妥當すべきであるとしたのである、と云ふことをかなり充分に指摘し得たと信する。この解釋は、彼が社會組織、生産方法の進化變革を信せず（たゞ單に社會の事物の進歩は、彼れの意識してゐたところであるが）、現今の社會組織、生産方法は永遠恒久なるものであつて、遠き過去より續き、更に永遠なる未來に續くものであるとする彼れの一般的態度より見て、正に當然であるであらう。(註) たゞリカアドは、かくの如くその勞働價值法則が或る一定の

1) Patten "The Interpretation of Ricardo," The Quarterly Journal of Economics, Vol. VIII, April 1893. Essays in Economic Theory. p. 147.  
に收録

歴史的發達階段に於ける價值現象の説明として歴史的性質のものであることを意識しなかつたのであるけれども、しかし彼れの價值論が當時の社會の交換現象をその研究對象とする以上、それは實質上多分に歴史的性質を有つてゐたことは争はれない。要するに彼れの趣意は、彼れの勞働價值法則が資本主義的社會(彼にありては原始社會を含む)を通じて、假令後に詳しく述ぶる如く若干の制限を受けつゝも、適用することを瞭にせんとするにあつたのである。

リカアドはかくの如くその勞働價值法則の妥當限界に就て、社會的生產方法の變遷を顧みるところがなかつたにしても、彼れの價值論が現實の價值現象を説明せんとするものなる限り、それは當時の資本主義社會に於ける價值論であることは言ふ迄もないのであるが、マルクスは更に一步を進めて、リカアドはその勞働價值法則が現實の資本家的社會に於て最も克く作用するものであるとした、と解釋する。彼はこの點に於て左の如く言つてゐる。

『ダヴィッド・リカアドは、アダム・スミスと異なり、非常に明瞭に、商品の價值は勞働時間に依つて決定せらるゝことを明かにし、且つこの法則が、一見この法則と矛盾するが如く見ゆるところの資本主義的生產關係を支配するものなることを示した。リカアドはその研究を全然價值量の問題に限定したが、尠くとも彼はこれと關聯してこの法則の實現されるのは一定の歴史的條件に因ると云ふ事實を意識してゐた。即ち彼は言つてゐる、「勞働時間にて價值量を決定し得るものは、産業によりて隨意にその量を増加することができ、而もその商品の生産に當つて競争が無制限に行はれる商品に對してのみ當嵌まるのである。」と。即ち實際上價值の法則が充分に作用して



ゐるのは、産業上の生産が大規模に行はれ、且つ自由競争の行はれてゐる社會即ち資本主義的社會についてのみである。<sup>1)</sup>』

こゝにマルクスが引用せる所のリカアドの詞の中『産業によりて云々』とあるは、原文 (such commodities only as can be increased in quantity) by the exertion of human industry を譯せるものであるが、デイル<sup>2)</sup>はマルクスがこの譯語として Industrie を當て嵌めるのは誤りであつて、それはよろしく Anstrengung menschlichen Fleisches とすべきであり、随つてマルクスのリカアドの勞働價值法則の充分に作用するのは、大規模に産業が行はるゝ所の資本主義的社會に於てゐると解することの全然誤解に基づくものなることを言つてゐる。しかし私はその譯語の當否は兎も角、このリカアドの章句は、前後の關係およびこの詞に續ける『それが生産に何等の抑制なしに、自由競争が行はるゝ所の云々』とある詞に徴して、當にマルクスの如く解釋すべきであると思ふ。

ところがリカアドに依れば、後に詳しく述ぶるが如く、異なれる生産部門に於て使用される各々の資本の持続性が異なる場合に於て (それは彼に依れば總ゆる社會を通じて見らるゝ所の現象である)、その本來の形に於ける勞働價值法則は修正せられて、勞賃、利潤も亦僅かの程度にてゐるが、交換價值の構成要素として認められてゐるのであるから、そうして各々の資本の持続性に異なる程度のある事實は、現今の社會に特に通有せる現象であるから、彼に依れば彼れの勞働價值法則は、現今の大規模の産業の社會に於て、純粹に、充分に作用することができないとせられてゐるに拘はらず、右に解せる如く、それが充分に作用するのは、現今の資本家的社會

1) Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie S. 43. (佐野學士譯本 66頁)

2) Diehl, a. a. O., S. 20.

に於てあるとするのはどうしたことであるか、それは前後矛盾を意味しないか、と云ふ疑問が當然に起つて来る。

しかし私は、それは決して矛盾にあらずして、そこには勞働價值法則の本質に關する最も注意すべき問題が横つてゐるのではないかと思ふ。私の見る所に依れば、リカアドの勞働價值法則は、現今の資本主義社會に於ける貨物の交換價值、價格を究極に於て支配するものとせられてゐるが、異なる生産部門に於て使用される資本の持續性に異なる段階ある場合（資本の有機的組成に差異ある場合）には、費されたる勞働は、個々的には、貨物の交換價值を決定することができない。この意味に於て勞働價值法則は、資本家的社會に於て、純粹に若くは充分に作用することから乖離せられるのである。しかしその半面に於て、費消せられたる勞働が貨物の交換價值を決定するのは、即ち社會的な勞働價值が成立するのは、商品の自由交換の諸條件が充分に具備せられ、商品はたゞ交換のために生産せられる、といふ社會に於て始めて見ることを得るものである。この意味に於て勞働價值法則は、經濟交通の發達、産業自由制度の最も顯著に現はらるゝ所の近代的産業社會に於て、最もよく貨物の交換價值、價格を決定するものである。勞働價值法則の『制限』とその『充分なる作用』とは、各々の異なる思考範圍に於けるそれ／＼であつて、決して一つの事物の正負を意味してゐるものではない。この態度はマルクスの價值論に於て最もよく現はれてゐると思ふのであるが、未だかゝる解釋を爲せるものを見出さない。それに就ては今猶ほ諸々の解釋があつて、容易に一致したる見解に達しない所のマルクスの勞働價值法則の本質は、かゝる解釋の態度をよることによつて甫めて瞭にせらるゝのではあるまいか。甚だ大膽な解釋であるが私はかう思ふのである。<sup>1)</sup>猶ほこの點に就ては『マルクスに於ける勞働價值法則の

1) マルクス價值論に於けるこの點に對する其の態度に就ては、最近河上博士、柳田民藏氏が各々立派なる研究をして居られることを追記しておく。（社會問題研究第六十二冊、改造、我等各々六月號）

妥當性」なる論文に於て詳しく述ぶることとし、今はたゞかゝる態度がリカアドの價值論に於ても、僅かの程度に於てあるが、已に現はれてゐると云ふことを指摘するに止めて置く。

リカアドが社會制度そのもの、變革進歩を信することなくしてその勞働價值法則は、單り原始社會に於て作用するものではなくして、それは現實の資本家的社會に於ける交換關係を支配するものであるとしたことは、スミスが費消勞働と現實の貨物の交換價值との關係に就て極めて充分なる態度を持してゐたことに對比して、勞働價值學說史上に於ける一大進歩を意味するものであると考へられるのであるが、しかしこのことはその半面に於て、リカアドが現實の交換現象をその勞働價值法則に依りて説明し、利潤對勞賃の關係を可成正確に把握せるに拘はらず、彼がその價值論を利潤の本質、餘剩價值の發生、資本家階級と勞働者階級との利害の衝突の理論に迄發展することができなかつた所以であると思ふ。スミスに於ては、原始社會に於て作用する所の價值法則は、資本主義的生産方法の出現と共に、或る變化を受けるものであるとしたのであつて（それは極めて不充分なるものであるが）、彼はすでに不充分乍ら剩餘價值の發生、資本家對勞働者の關係の存立を暗示してゐるのである。そうしてそれはスミス價值論のリカアド價值論に優る一功績として擧げるに足るであらう。

(註) リカアドがこの資本家的生産方法若くは社會制度を永久的なる形態として觀じてゐたことは、彼れの價值論に於て現はるゝ態度に依つてよく想像することができるのであるが、マルクスはこのリカアドの態度に就て左の如く批評してゐる。

『しかしリカアドは、資本主義社會に於ける勞働の形態を以て、社會的勞働の永久的自然的形態として觀察してゐた。彼は原始的漁夫と原始的獵師とを商品の所有者と看做し、その魚と獵物とを、その交換價值に體現せられたる勞働時間量に應じて、交換せしめた。この場合彼は原始的漁夫と原始的獵師とがその勞働器具を計算するに當り、一八一七年に倫敦取引所に普會以外に知つてゐた唯一の社會狀態であつたと思はれる。』

(未完)